## STAGE 4 文学的文章Ⅱ

12/10（土）

1 (ア) 2 (イ) 3 (ウ) 4 (エ) 1 (オ) 4

解答（P.14・15）

解説

1 (ア) 空欄の直後に「心臓を……衝撃に呻いていた」とあることから、東真は、映子の絵を見て衝撃を受けていることがわかる。よって、2の「息をのんだ（＝はっと驚いて息をとめる様子を表す）」が入る。1の「息をついた」は、「安心してほっとする様子」、3の「息を吹き返した」は、「生き返る様子」、4の「息を殺した」は、「呼吸をおさえて音をたてないようにする様子」をそれぞれ表す。

(イ) 傍線部の直後にある「これは何だと叫びたかった……息が詰まり　手が震え、足元が定まらない。すごい」に注目する。映子の絵から東真は並々ならぬ「気配」や「光芒（＝光）」を感じており、それに圧倒されているのである。

(ウ) 傍線部の直後で、映子が「ごめんなさい」と東真に謝っている理由を考える。一つは、映子が東真に断りもなく勝手に東真の絵を描いていたことで、もう一つは、その絵が東真への好意の表れだということである。そのことを本人に知られてしまい、激しく動揺しているのである。

(エ) 傍線部の次の段落の「ほんとに、好きだったんだ……傍にいて楽しかった」や、さらに次の段落の「映子を創っているもの一つ一つが愛しくて」という部分に注目する。

(オ) 傍線部の直前の「好きだった。だけど傍らにいることに耐えられない」に注目する。東真が、映子のことを「好き」なのに「（映子の）傍らにいることに耐えられない」という相反する気持ちになってしまうのは、映子の傍らにいると「自分の凡庸さを突きつけられる苦渋」を味わうことになってしまうと、東真が感じていたからである。

## STAGE 6 説明的文章（社会科学）

1 (ア) 2 (イ) 1 (ウ) 4 (エ) 質 (オ) 3 (カ) 2 (キ)（普段は意識されない）日本人に共通した自然を感じる（ような文化。）（14字） (ク) 3

解答（P.29・30）

解説

1 (ア) 第二段落目の最後に「と知人は話した」とあるので、この前までが知人が話した内容となる。

(イ) 「期する」には、「期限を決める」「覚悟する」「期待する」といった意味がある。ただ、「期せずして」と使う場合には「思いがけず」の意味で使われることが多い。

(ウ) 「けげんな」は、何となく疑わしく合点がいかない様子を表す。スイス人は、一座の雰囲気が急に変わったことに合点がいかず、特別な何かがあるのかと思って尋ねたのである。

(エ) 「感じ方の違い」のことであるが、次の段落に「細かな感受性の質」とある。ここから「質の違い」を導く。

(オ) 傍線部の中にある「そんな」は、直前の「細かな感受性の質などには現代文化は本当になんの関係もないものになってしまった」という内容を指す。「そんなふうな文化論」と同様の内容である。

(カ) 「新しい」にあてはまるものを探すと、第四段落に「近代化し合理化した、現代」とある。

(キ) 「体でつかんでいる」というのは、「意識しなくても、無意識に」という意味である。昔から日本人の間で意識することもなく受けついできた文化を述べたもので、こうした文化が、ふとしたことで現れることがあるのである。

(ク) 古くから受けついできたものは、体にしみこんでいるために、感じ方はたやすくは変わらないということである。

解答（P 42〜49）

2

(ア) （例）二〇一一年の調査で回答した人の割合が最も多かったのは、「美しい自然」で、以降「すぐれた文化や芸術」、「長い伝統と歴史」と続いています。（67字）

(イ) （例）最近の日本人は、美しい日本の自然を子孫に残していきたいと願う人が増えたが、その背景には、近年、深刻さが増している自然破壊や環境問題に対する不安があるのではないかということです。（88字）

解説

3

(ア) ［　　］の直前に「十代から三十代の若い世代は、いずれも十パーセント以上の増加率を示しており」とあるのに注意する。平成十六年から平成二十三年の、十代から三十代の割合を見ていくと、十六から十九歳は25％、二十代は10％、三十代は13％増加していることがわかる。これをふまえた上で、さらに、指定語である「顕著」を使って述べるべき内容がどのようなものかを考えなければならない。十代から三十代の中でも増加率が「顕著」なのは、十六から十九歳であるとわかるので、十六から十九歳が、25％という顕著な増加率を示していることを書く。

(イ) Bさんの発表のまとめである「（若い世代の）言葉づかいに対する意識は確実に高まっている」という部分と、Cさんの発表のまとめである「全体として、正しい言葉づかいや美しい言葉づかいを心がけようとする意識が、特に強まっている」という内容とを、うまくつなぎ合わせて書く。

解答（P50～53）

3
(ア) A 1 B 1 (イ) 灰 (ウ) 3 (エ) 2・3

解説

3
(ア) Aは、直後に「その子細をたづねければ」とあるので、「納得できない、理解できない」ことだとわかる。Bの「あまた」は、数が多いことをいう。
(イ) 「鉢に灰を入れて置きたるけるを…」とあるので、鉢に入った「灰」であるとわかる。
(ウ) 「かかる」は、「このような」という意味の指示語である。ここでは、盗人の行動から考える。盗みを働こうとする心を初めてもった、ということを説明している。
(エ) 盗みを働いた者を許し、少しの品を与えたことがまず考えられる。「又優なり」とあるので、まだほかにもあると考える。最後のあるじの言葉に「のちのちにも、さほどに詮尽きん時は、はばからず来りて言へ」とあり、のちのちも困ったときには面倒を見ようとしていることがわかる。

【口語訳】

あるところに盗人が入ることがあった。主人は起き出して、（盗人が）帰ろうとする所を捕まえてやろうと思って、その道で待ち構えて、障子の破れからのぞいていたが、盗人は物を少しとって袋に入れて、みなはとらず、少しばかりを盗んで帰ろうとするが、下げ棚の上に、鉢に灰を入れておいてあったのを、この盗人は何を思ったのだろうか、（灰を）つかんで食った後、袋に盗んで入れた物を、もとのように置いて帰った。（主人は）待ち構えていたことなので、組み伏せて捕まえてしまった。この盗人の振る舞いは（主人には）理解しがたくて、その詳しい理由をたずねたところ、盗人がいうことには、「私にはもともと盗みの心はありません。この一、二日食べるものがなくて、どうしようもなく腹がすいてしまいましたので、はじめてこのような心になって、（盗みに）やってまいったのです。ところが、御棚に麦の粉であろうと思われる物が手に触りまして、何か食べたいと思っていましたので、つかんで食べましたが、はじめはあまりに飢えた口でしたので、何であるかもわかりません。何度も口にし、初めて灰でございましたことがわかり、その後は食べないようになりました。食べ物ではない物を食べたのではございますが、これを腹に入れてしまいましたら、物の欲しさが止みました。これを思うと、この飢えに耐えられないので、このようなあるまじき気持ちが出てきてしまいましたが、灰を食べても簡単に直ってしまいましたことを思いまして、盗んだ物をもとのように戻したのでございます」と言うので、気の毒にも思いがけないことにも思われて、少しばかりの品物を取らせて、帰してやった。「のちのちにも、そのようにどうしようもなくなった時は、遠慮せず来て言いなさい」と言って、常に面倒を見てやった。盗人のこの心は感心なことである。家の主人のあわれむ気持ちもまた、すばらしいことである。